

大学史ニュース

第24号

2023年2月15日 発行

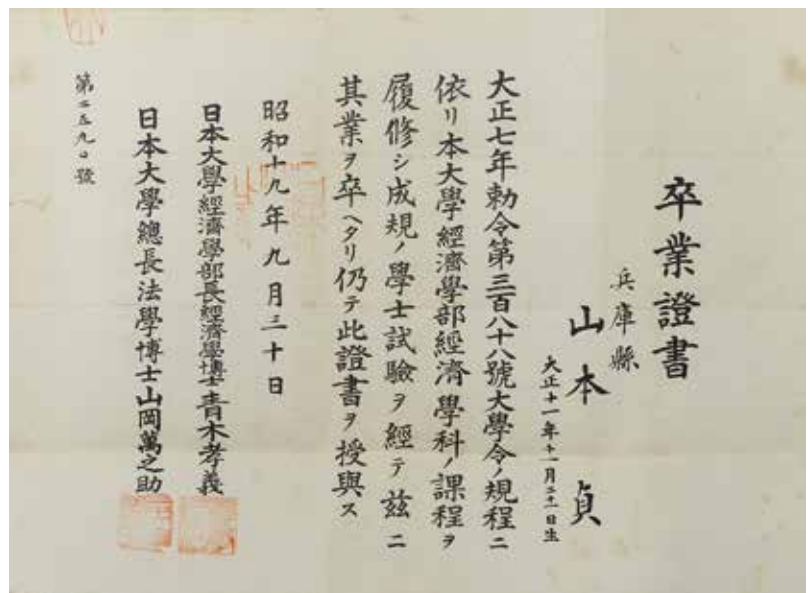
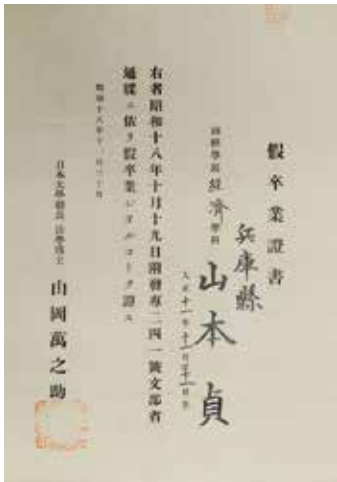
目次

寄贈資料紹介

- ◇学徒兵の卒業アルバム…………… 2
- ◇レスリング部関係資料等の寄贈…………… 2

水泳部関係調査

- ◇「水の覇者日大」の楽譜…………… 3
- ◇浜松出身の水泳選手・古橋廣之進…………… 4



学徒兵の卒業証書

今年、昭和18（1943）年10月21日に神宮外苑競技場で挙行された「出陣学徒壮行会」から80年になります。参加した学徒（学生と生徒）は、同年10月2日に公布された「在学徴集延期臨時特例」（勅令第755号）の対象となった者たちでした。彼らのうち、昭和19年9月の卒業予定者には、18年度分の授業料納付などの条件を満たせば仮卒業証書が出され、1年後、出征家族に正式な卒業証書が渡されました。

上の写真は、商経学部経済学科在学中に出征した山本貞の仮卒業証書と卒業証書で、昨年10月に甥の山本久氏から関係資料14点と共に寄贈されました。中でも、日本大学の仮卒業証書は初めて目にするものでした。なお、商経学部は昭和19年2月に経済学部と改称しているため、正式な証書は経済学部から授与されています。

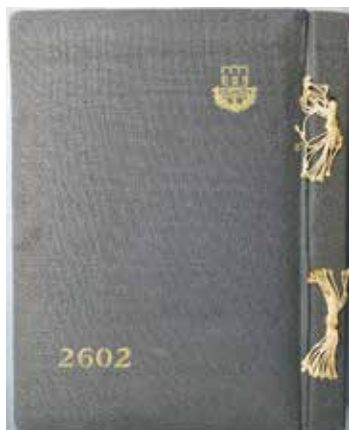
山本貞は、学生時代は水泳部で飛び込みの選手として活躍。18年12月、姫路（兵庫県）の部隊に入営し経理部幹部候補生となります。教育終了後、所属した部隊はビルマに派遣され、20年4月23日にトンゲー（シタン河畔の小都市）方面で戦死しました。



山本貞（陸軍兵長軍装）

（高橋）

学徒兵の卒業アルバム



商経学部経済学科
昭和16年度卒業アルバム

令和4（2022）年12月、東京都在住の海津良恵氏から、父小松利明の遺品8点の寄贈を受けました。その一つが左の写真の商経学部経済学科の卒業アルバムで、表紙に「2602」と数字があります。これは皇紀*2602年＝昭和17（1942）年のことです。

小松は、日本大学予科文科から昭和14年4月に経済学部に進んでいます。本来なら、卒業は17年3月となりますが、16年10月に高等教育機関の修業年限を6ヵ月以内短縮できる法令が制定され、同年度の卒業は12月となりました。寄贈資料に含まれていた学部の卒業証書も16年12月28日となっています。

しかし卒業アルバムには「昭和拾七年参月卒業」と記されており、短縮された学生生活に対する彼らの思いを感じ取れます。小松は、17年2月に入営し、陸軍経理部幹部候補生を経て、中支を転戦の後18年9月から大阪陸軍造兵廠に勤務し、終戦を迎えています。

* 皇紀は神武天皇の即位を元年とした日本独自の暦



（高橋） 陸軍時代の小松利明（前列左）

レスリング部関係資料等の寄贈

令和4年6月、埼玉県在住の齋藤庸子氏より、本学卒業生である父・石井理統^{よしつぐ}氏旧蔵の資料をご寄贈いただきました。



昭和31年の関東大学レスリングリーグ戦パンフレット。日本大学はこの年に2部で優勝し、1部昇格を果たした。

石井氏をはじめ経済学部に入學し、のちに新設されてまもない工学部経営工学科（現在の生産工学部）に転部、昭和33（1958）年3月に卒業しました。在学中にはレスリング部に所属していました。

寄贈いただいた資料は石井氏が本学に在籍していた昭和20年代後半から30年代前半の世田谷教養部、経済学部、工学部、レスリング部等に関するもので、当時の各部科校での学生生活を垣間見ることができます。

当課ではこれまでレスリング部に関する資料をほぼ所蔵していませんでしたが、今回資料を寄贈いただいたことにより、戦後間もない頃の同部の活動の様子を確認することができました。

貴重な資料をご寄贈いただいた齋藤氏に記して御礼申し上げます。

（上野平）



レスリング部合宿 昭和29年8月

「水の覇者日大」の楽譜



昭和23年頃の古関裕而

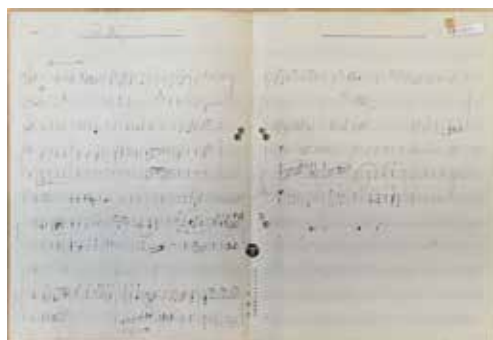
令和4（2022）年11月、福島市古関裕而記念館を訪問し、調査・撮影を行いました。同館が古関裕而が作曲した「水の覇者日大」の楽譜を所蔵しているとの情報を得て、事前に連絡を取ったところ、関連する資料として、当時、日本大学から古関裕而へ宛てた感謝状と水泳部員から贈られた寄せ書きもあるとの情報もいただきました。

福島市古関裕而記念館は、福島市大町の出身で福島市名誉市民第1号である大作曲家、古関裕而先生の業績を称え、後世にその業績と「古関メロディー」を広く継承していくこと、また音楽文化の振興に資するため、市制80周年記念事業として昭和63年（1988年）11

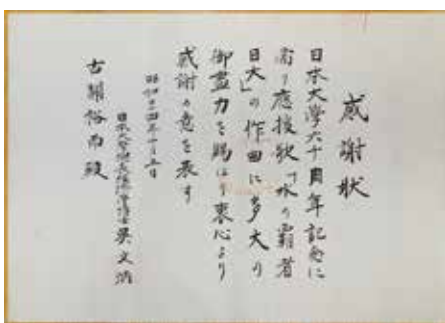
月12日にオープンしました（同館HPより）。

古関裕而は、流行歌はもちろん応援歌などの作曲も多く手掛けています。プロ野球関係では「阪神タイガースの歌」（通称六甲おろし）や「巨人軍の歌—闘魂こめて—」を、大学関係では「紺碧の空（早稲田大学応援歌）」や「我ぞ覇者（慶應義塾応援歌）」などを作曲しています。

今回調査した「水の覇者日大」は、昭和24年の「全米水上選手権」で中心となって活躍した日本大学水泳部の古橋廣之進や橋爪四郎らを称え、サトウハチロー（詩人・小説家）が書いた詩に古関裕而が曲をつけました。楽譜は、「日本コロムビア 文芸部」と入った五線紙に書かれ、曲名は単に「日大」となっていますが、二つ折りに綴じると縦書きで「日大水泳」「水の覇者日大」と記載されています。



「水の覇者日大」楽譜

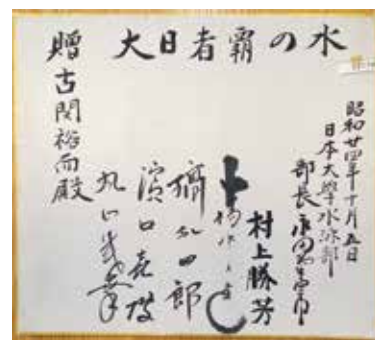


日本大学からの感謝状

の初日に、古関裕而自らの指揮で行われました。同日付で、当時総長の呉文炳あき名の感謝状と、水泳部長永田菊四郎（法学部教授）、監督村上勝芳、部員古橋廣之進・橋爪四郎・濱口喜博・丸山茂幸の寄せ書きが、古関裕而へ贈られました。

昭和27年5月には、古関裕而とは旧知の伊藤久男が吹き込んだレコードが作製されています（『日本大学新聞』第522号 昭和27年6月1日付）。

本稿で掲載した古関裕而肖像写真及び資料3点は福島市古関裕而記念館所蔵です。調査にご協力いただいた、福島市古関裕而記念館及び同館学芸員本間真美様に謝意を申し上げます。



水泳部からの寄せ書き

（高橋）

浜松出身の水泳選手・古橋廣之進

戦後日本を代表するスポーツマンの一人としてまず名前が挙がるであろう水泳選手・古橋廣之進は日本大学法文学部の出身です。当課では古橋に関する資料群を寄贈いただき、整理・調査を進めております。この資料群については『日本大学大学史ニュース』第21号（令和4年）、『鬘誌』第17号（令和4年）と第18号（令和5年2月刊行予定）でも紹介してきた通りですが、令和4年8月に古橋の出身地である静岡県において、関連資料の調査を行いました。

昭和3（1928）年に静岡県浜名郡雄踏町（現在の浜松市）の浜名湖にほど近い家で生まれた古橋は、小学校4年生の時に水泳を始めます。きっかけは、地元の篤志家が近所にプール（山崎プール）を作ったことでした。それまでは相撲取りを目指していましたが、父とプール開きに出かけ、水泳と出会ったことで運命が変わります。小学生時代には県下の学童記録も作り、地元新聞で「豆魚雷」と紹介されました。



山崎プール跡の古橋顕彰碑



雄踏小学校前の看板

中学生時代の半ばで戦局が激しくなってきたこと、また勤労奉仕の折に不慮の事故で左手中指を大怪我したことから、古橋は一時水泳から離れますが、日本大学進学後、小中学校時代の活躍を知っていた同郷の友人による誘いを受けて、再び水泳を始めました。

日本大学水泳部に入った当初は、終戦直後の食糧事情や練習環境の悪さもあって非常に苦勞しました。昭和21年に入り、徐々に競技大会が再開されるようになると次々と好成績を残し、世間から注目されはじめます。この年、古橋は400m自由形においてアメリカのマクレーンが持っていた記録を抜き、世界最高記録を叩き出しました。古橋は翌22年8月の日本選手権でも次々と日本新記録と世界新記録を更新し、敗戦に沈んでいた日本の人々を熱狂の渦に巻き込みました。

古橋をはじめとする日本の水泳選手たちの好成績が認められ、古橋・橋爪四郎・濱口喜博・丸山茂幸（以上日本大学）・村山修一・田中純夫（以上早稲田大学）の6名は昭和24年に全米男子屋外水上選手権大会に招待されました。ここでも古橋は4競技において世界新記録を更新し、「フジヤマのトビウオ」として世界に名を轟かせました。

昭和27年に参加したヘルシンキ五輪では残念ながらメダル獲得とはなりませんでしたが、古橋は引退後も会社員と水泳の指導者の二足の草鞋を履いて日本の競泳界を牽引し続けました。

古橋は地元・浜松でも非常に愛され、平成6年に雄踏町初の名誉町民となります。また、平成21年に浜松市に誕生した総合プールは「古橋廣之進記念浜松市総合水泳場ToBiO」と名付けられました。ToBiOには日本水泳の歴史資料室が設けられており、古橋のトロフィーやメダルといった貴重な品々が展示されています。またプールの一角には古橋専用座席が設けられており、今もプールの片隅で後進のスイマーたちを見守っています。



浜松での合宿 昭和23年

今回の調査にあたりご協力いただいた古橋廣之進記念浜松市総合水泳場ToBiOの皆様には記して感謝申し上げます。

（上野平）



雄踏町の広報誌



古橋廣之進記念浜松市総合水泳場ToBiO



ToBiO内の古橋胸像



ToBiO内の資料室入口



ToBiO内の古橋専用シート

「ベートーヴェンの夕 日本大学芸術科交響楽団 第一回演奏会」パンフレット



「ベートーヴェンの夕^{ゆうべ} 日本大学芸術科交響楽団 第一回演奏会」のパンフレットを昨年入手しました。昭和13（1938）年春に発足した日本大学芸術科交響楽団が、同年12月9日に日本青年館で行った初公演時のものです。

交響楽団は芸術科長の松原寛、交響楽団長の芸術科教授小松耕輔、指揮者の同科講師小松平五郎、ピアノ奏者の同科卒業生である福田喜久子のほか、19名の顧問と58名の団員で構成され、当日は管弦楽曲2曲とピアノ協奏曲1曲を演奏しました。公演名に「ベートーヴェンの夕」とある通り、3曲全てベートーヴェン作の楽曲でした。本演奏会については

12月5日付の『日本大学新聞』第309号でも開催予告が報じられており、各顧問の意見を聞いてベートーヴェンのみの曲目に決定したと書かれています。

また、見出しには「日本一の顔ぶれ揃へ」、記事の書き出しには「世界随一の大交響楽団の完成を目指し」とあり、試験によって選抜された芸術科の学生に加え、卒業生、教授、講師、その他関係者など、多様な層から日本大学芸術科を代表する実力のある演奏者が集められました。

(図子)



練習中の団員と小松平五郎・福田喜久子
（『日本大学新聞』第309号 昭和13年12月5日付）

関東大震災前の駿河台校舎について

広報課発行『桜門春秋』146号（令和4年11月発行）の「学び舎の記憶」というコラムで駿河台校舎を取り上げました。御茶ノ水にあった駿河台校舎は、本学が初めて三崎町以外に取得した校舎で、関東大震災後の駿河台校舎は、歯科（現・歯学部）、高等工学校（現・理工学部）、医学科（現・医学部）が使用していました。『桜門春秋』では関東大震災後に建設された駿河台校舎を中心に書きましたが、ここでは震災前の駿河台校舎を取り上げたいと思います。

関東大震災前の駿河台校舎は資料が少ないため不明な点が多く、『日本大学百年史』第5巻（年表・索引編）の大正10（1921）年の項には、次の2件の年表記事があります。

- 10.15 日本大学駿河台分校上棟式を挙（11月完成、附属歯科病院・受付・予診室、薬局等を設備）
- 10.一 日本大学高等工学校校舎新築着工（神田区駿河台北甲賀町、現理工学部第1号館所在地）



新築なりし駿河台校舎
（『日大新聞』第7号 大正11年2月27日付）

この記述を見ると、大正10年に歯科使用の「駿河台分校」と、高等工学校使用の校舎がそれぞれ建設着工したように受け取れます。学部の年史の記述を見てみると、『日本大学理工学部五十年史』には、「開校後1カ年を経た大正10年10月、駿河台北甲賀町（現在の理工学部駿河台校舎付近）に高等工学校のみ単独校舎を建設、同11月、三崎町より移転して授業を開始した。」とあります。たしかに高等工学校のみ単独校舎と書いてあります。また、『日本大学歯学部六十年史』では、「大正10年には東洋歯科医学専門学校の新校舎が完成し外郭が整備される」とあり、日本大学合併前の東洋歯科医学専門学校が新校舎を建設したと記載されています。理工学部、歯学部の年史の記述は、『日本大学百年史』通史編にも影響しており、高等工学校と歯科は別々の校舎を建てたような記述となっています。

関東大震災前の本学関係資料は少ないのですが、同時代的な資料でいくつか確認してみます。『日大新聞』（現・日本大学新聞）第2号（大正10年11月9日付）には駿河台校舎上棟式の記事があり、春から駿河台で歯科を開業しているが校舎狭隘のため「三階建の堂々たる講堂を新築する事となった」とし、「新築落成は本月末で校舎が出来上ると高等工学校も駿河台の方に移る筈」と記されています。

また、日本大学工科土木科の大正12年卒業記念写真帳には、駿河台校舎の入口付近の写真が掲載されていますが、その門柱には、「日本大学高等工学校」「日本大学歯科」と表札が並んで掲げられています。これを見ると、高等工学校と歯科が同じ入口から入っていることとなります。

高等工学校の機関雑誌『竣工』2巻6号（大正15年6月）には、震災前の校舎の思い出が記されています。そこには、「十月竣工する筈なのが翌年になったので、一月の第三学期から這入る様になったのである。校舎の裏が崖になって居て…」とあります。現・歯学部本館と現・理工学部1号館が立っている場所の間には崖があったので、この記述を読むと高等工学校は現・歯学部本館の場所、すなわち歯科の敷地にあったことがわかります。さらに、「駿



駿河台校舎入口（大正11～12年）

河台へ移ったのは嬉しかったが、僕等が一番貧^{くじ}棒圖を引いた。元此の駿河台は露国政府の経営に係る神学校の敷地で…」と記してあります。歯科の前身である東洋歯科医学専門学校が取得した土地は神学校があった土地ですので、これも駿河台校舎が歯科の敷地にあり、そこで高等工学校生徒も学んでいたことを示しています。つまり、同時代的な資料によると、駿河台校舎は現在の歯学部の敷地に建てられており、そこを歯科と高等工学校が使用していたこととなります。

これらのことを考慮すると、『日本大学理工学部五十年史』の「高等工学校のみ単独校舎」という表現は、専門部法科、商科、文科などと夜間に共同利用していた三崎町校舎から駿河台に移ったという意味と理解できます。駿河台校舎は、昼間は専門部歯科が、夜間は高等工学校が単独で使用していましたので、理工学部五十年史の記述は、学部史としては何も間違っていないのです。

震災前の駿河台校舎については、今後も資料収集を進めていきたいと思います。学部の年史は主体が学部であることを考慮することが必要であり、大学全体の年史編纂で利用する際には十分な注意を払うことが必要であるとあらためて感じました。

(松原)

【参考文献】

- 『桜門春秋』146号（日本大学企画広報部広報課、令和4年）
- 『日本大学理工学部五十年史』（日本大学理工学部、昭和48年）
- 『日本大学歯学部六十年史』（日本大学歯学部、昭和54年）

全国大学史資料協議会2022年度総会及び全国研究会



全国研究会での総括討論

昨年10月5～7日、神奈川大学みなとみらいキャンパスにて全国大学史資料協議会2022年度総会及び全国研究会が、対面とオンラインの両形式で開催されました。対面での実施は3年ぶりとなりました。

初日は総会と、神奈川大学日本常民文化研究所所長・国際日本学部教授の安室知氏による「日本常民文化研究所と渋沢敬三の思い」と題した記念講演が行われました。

2日目の全国研究会では「地域と大学」というテーマの下、大阪商業大学商業史博物館・明尾圭造氏、帝京大学総合博物館・堀越峰之氏、自由学園資料室・村上民氏と菅原然子氏による事例報告と総括討論がなされました。

最終日の見学会は神奈川県立公文書館で実施され、公文書館職員の関根豊氏による「神奈川県立公文書館の業務と施設—公文書館の評価選別を中心に—」と題した講演の後、同館職員の案内のもと館内を見学しました。

「地域と大学」という視点で各組織における様々な取り組みを知ることができ、大変実りのある3日間となりました。



神奈川公文書館内の見学

(図子)

